

パスカルの「賭け」について

上田, 富美子

<https://doi.org/10.15017/93>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 5, pp.13-21, 1978-03-25. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：



パスカルの「賭け」について

« Jeu » de Pascal

上 田 富 美 子

Fumiko Ueda

パスカルの有名な「賭け」(jeu)についての断章(233¹)は、一体何を言おうとしているのであろうか。その内容は表面的には極めて明白であり、「神」(Dieu)の方へすでに賭けてしまっているパスカルが、まだその方へと賭け得ないでいる人々に対し、あらゆる努力を傾けて賭けよと説得するものである。だがそこには単にそれだけのことではなく、語られない多くの問題が潜んでいるように思われてならない。その点を明らかにすることによって、私なりにパスカルの「賭け」の問題への接近をはかることがこの小論の目的である。ただし、私はパスカルと異なり、「神」の側へまだ賭けていない者であり、正確には「神」に対する切迫した関心すら抱き得ていない者であると言った方が適切であろう。だからこの主題への接近は、そのような限定のもとに行われざるを得ないことを予め断って置きたい。

この章はまず、「神」についてのあの伝統的推論を以てはじめられる。即ち、「我々は有限なもの(fini)の存在(existence)と本性(nature)を知っている(connaître)、なぜなら我々は有限なものと同様に有限であり、また広がりを持つ(étendu)からである。我々は無限なもの(infini)の存在を知りその本性を知らない、なぜならそれは我々と同様に広がりを持っているからであり、しかし我々と違って限界(borne)を持たないからである。しかしながら、我々は神(Dieu)の存在を知らずその

本性を知らない、なぜなら神は広がりを持たずまた限界をも持たないからである。」(233)パスカルがこの内容空疎な形式的推論に託したかったものは何であらうか。それは一見、続く論述の導きの糸としての装飾的意義しか持っていないように見える。と言うのは、引き続き彼は以下のように述べているのであるから。即ち「もし神があるとするならば、それは限りなく不可解(incompréhensible)である。なぜなら神は部分(partie)も持たず限界(borne)も持たないので、我々と何の関係(rapport)も持たないからである。それゆえ我々は神がどういものであるかをも、また神が在るかどういものであるかをも知ることはできない。そうだとすれば、誰がこの問題を解決しようと敢えて企てるのであろうか。神と何の関係も持たない我々には解決できない。」(233)ここではさきの推論の結果を受けて、神が不可解であり我々と何の関係も持たないということが力説されている。してみるとパスカルは、神と我々との超え難い断絶を強調したいがために、かの推論を援用したのだと想定することが可能であろう。そして、もしそうだとすれば、いきなり古典的推論が持ち出されて来たことへの我々のとまどいも幾分和げられる。なぜならここに主張されていることは、まだ神へ賭け得ないでいる我々自身にも十分納得の行くことだからである。

だがこの推論の引用にはそのような軽い意味ばかりでなく、もっと別の意味がこめられているはしないだろうか。それは彼自身によって明言

はされていないものの、ひそかに前提されていたことのように思われる。つまり、さきの推論で推理の糸が、「神」の概念によって断ち切られ行きづまるといふかたちが示されることから、神を不可知とし、神との間に絶対的隔絶を置かれるのは、厳密には推理能力即ち「理性」(raison)であるということが暗示されているように思えるからである。そのことは実際、この推論を受けた帰結の部分で、以下のように語られていることによって明白になる。即ち「神はある、或は神はない。しかしどちらの側に我々は傾こうか。理性(raison)はここで何事も決定する(déterminer)ことができない。我々を隔てて一つの無限の混沌(chaos)がある。この無限の距離のはてにおいて賭けが行われている。表(croix)が出るかそれとも裏(pile)が出る。君はどちらに賭けるか。理性によれば君はどちらにも賭けることはできない。理性によれば君は二つのうちどちらを捨てるということとはできない。」(233 傍点筆者)

さて、先立つ論述を受けてのパスカルのこの帰結もまた、我々の十分な承認を得るものであろう。なぜなら、ここでは視点は主題である神への「賭け」の方へ移されているものの、我々と「神」との断絶、正確には我々の「理性」と「神」との断絶ということをも前提とするならば、ここに語られているように神への賭けなどおおよそ問題になり得ないし、たとえそのことが可能であったにしても、我々を超えた我々にかかわりのない次元でのことと見なされざるを得ないからである。このように見て来ると、これまでのところ、「神」は我々にとって事実上無に等しく、たとえそれ以上の規定が許されたにしても、せいぜい不可解な暗黒として放置されているに過ぎないと言ふことができるであろう。そしてまたこのような「神」像こそ、神に何らの関心も寄せず、だから無論まだ神へと賭け得ないでいる我々自身が抱く「神」像そのものではあるまいか。このことは、すでに神へと賭けてしまっているパスカルが一先ず我々と同一地点に立ち、そしてそれはまた同時に、パスカル自身の過去の体験を前提としたものであり、それゆえに空疎な仮

定ではなく、彼が身を以て経て来た事柄でもあったと言ふことができる。この章の人の心を捉えて離さない力はおそらくそこにこそ由来するものと思われ、それはまた「panse」全篇を貫く姿勢でもあったと言えよう。

しかしながら、続くパスカルの言葉はそのような立場に安住することを許さず、鋭い語気で我々に迫って来る。彼は言う。「だが賭けはしななければならない。それは気まま(volontaire)のことではない。君は船出をしている(embarque)のである。」(233 傍点筆者) この一転して力づよい説得は一体どこからもたらされたものであろうか。ここには、前述の無関心な態度とは余りに大きな隔りが見られはしないだろうか。だがその間隙を埋める言葉は、パスカル自身の中には見出されない。しかしながら、この章の問題解明のための重要な鍵は、そこにこそ隠されているのではないだろうか。そこで以下、この点について論究を試みたい。

もし神が我々の理性を以ては近付き得ない絶対的断絶の彼方のものならば、前に述べたように、神は理性にとって全く無関係な存在となり、そこから神への賭けの方へといざなう積極的動機は理性自身のうちには生じようがないことになる。だとすると、「賭けねばならない」(falloir parier)という切迫した状況は、理性がぎりぎりまで追いつめられてこそはじめて可能になるのではないだろうか。つまり理性が自らの限界を自覚した時、更に言えば自らが何ものであるかを明確に意識した時にこそ。自らを知った時はじめて自らを超え出ることができるという、自己の体験に深く根ざすパスカルの根本思想が、その意味でこの場合にも下敷きになっていると言ふことができるであろう。いずれの場合もそうであるように。その時にこそ理性は独断の眠りを破られ、自らを超えたものの前に助けもなく自らをさらさざるを得ないであろうから。その一点を除いて理性は、おそらく、自らを超えたものに如何なるかにちであれかかわることはないであろうから。ところでもしそうであるならば、この点について明らかにするためには、「理性」(raison)とは何であるかが、まずもっ

て考察されなければならないであろう。

パスカルも「理性」を一応推理能力と見なし
ていることは、さきに述べたように、冒頭に掲げ
られたあの推論によっても明らかに示される
ところである。そのほか「パンセ」全篇を通じ
てそのことは保証される。(1, 2, 3, 4, 282 など
参照) ところでパスカルがあの推論を以てはじ
めた意図は、そこに「理性」の根本性格が典型
的に示されていることを鋭く見抜いていたから
であるように思えてならない。そうであるなら
ば、何気ないかたちで出されているように見え
るあの推論の意味は、いよいよ重いものになって
来ざるを得ない。その点についてパスカル自身
は何一つ触れていないが故に、いよいよその感
を深くする。そこであの推論を手がかりに、パ
スカルが心ひそかに抱いていたと思われる「理
性」の特質を可能な限り描き出してみたい。さ
て、あの推論が言おうとしていることは一体何
なのであろうか。それは何か実りのある結論を
導き出しているであろうか。あの推論には、
すでに或る前提が隠されているように思える。
それは、「有限で延長を持つ者である我々は、
有限で延長を持つものだけを了解し得る。」と
いうことである。そして、若干の変形は与えら
れているにもせよ、あの推論はそれ以上の何も
をも積極的には表明していないのではあるまい
か。ところで「有限性」と「延長性」とは一体
何であらうか。それは、理性が対象から切り取
ったものに過ぎないのではないだろうか。つま
り、理性は自らが予め切り取ったものを了解す
るということ、そこには未知なるものが理解
されるということは意味されていない。自らが
予め対象の中に投入し前提したものを、後から
是認し追認するということが以上のことはなされ
ていない。従って、理性による推理は、前提に過
誤がないことを後から確認する作業であり、その
意味で一つの循環であり、同一律の域を出るも
のではない。言い換えれば、そこに示されるの
は自己同一、自己完結、自己充足の世界であり、
完璧な論理の展開は自画自讃にも相当する行為
と見なされるであろう。さて、先取りしたもの
を承認するのが理性の行為であってみれば、自

らを超え出たものに対し理性が何ら関知しない
のは当然のことであって、それは理性の本性そ
のものから由来するものと言うことができる。

ところでこのような自己充足的な理性にとっ
ては、自らを超えたものへの関心は抱きようがな
く、従って「賭け」ということも問題にならな
いと言うことができるであろうが、もしそのよ
うな事態が生ずるとすれば、そこには態度の根
本的变化がもたらされているのでなければなら
ない。それは最早自己充足を許さない態度であ
り、前に述べたように、それは自己の限界を覚
った時にもたらされる。言い換えれば、理性が
自らの根本性格をそのようなものとして見破っ
た時、自らの本性を蔽い隠しようもなく知った
時にもたらされる。従って、このような態度の根
本的变化を迫られた理性は、推理を中心とする
自己充足的な理性に対し、自覚的理性と呼ばれ
ることもできるであろう。そしてそのような理
性についての記述は、確かにパスカル自身の中
に見出すことができる。例えば、「理性の最後
の歩み (la dernière démarche de la
raison) は、理性を超えた (surpasser) 事
物が限りなくあるということを認める (recon-
naître) ことである。もしそれを認めるに至
らないなら、理性は弱い (faible) ものに過ぎ
ない。」(267) また、「理性は、もしその
服従し (soumettre) なければならない場合のあ
ることを判定し (juger) ないなら、決して服従
しはしないだろう。」(270) 更に、「理性にと
って、理性の否認 (désaveu) ということがほ
どふさわしい (conforme) ものではない。」(292) こ
れらはいずれも自己充足的な理性についてではな
く、自らの限界を自覚した理性についての言及で
あると言うことができる。それは理性の自己超克
と呼ぶにふさわしいものでもあろう。

では、このような理性の限界の自覚、理性の
超克は如何なる契機によって生じるのであろう
か。それは、理性の本性そのものを手がかりに
して推定することが可能である。つまり、理性
の特質は、前述のように自ら先取りしたものを追
認することにあるとすれば、それが切り取り承
認したものが理性にとってはすべてであるにし

でも、理性がそこから素材を得る「現実」は理性によって完全に取り込まれることはあり得ない。理性がかかわることができるのは自らが了解可能な現実の一部に過ぎず、その大部分は不明の暗黒の中に放置されている。これは一つの厳然たる事実であり、この事実気付いた時、理性は自己充足の夢を打ち破られ、自己の行きづまりを思い知らされざるを得ない。してみると、理性がその内部に視点を当てる限り、そこに展開するのは自己完結的な世界であり、理性の破綻は生じようがないが、もし一度理性が、自らの外に目を転じるならば、その自己完結性はたちまちにしておびやかされることがわかる。従って、理性の限界の自覚即ち自己認識というその自己超克の契機は、理性の外に、現実の中に見出されるほかないであろう。ところで、理性がそこから素材を得る無前提的現実、パスカルのいわゆる「繊細の精神」(esprit de finesse) ないし「心情」(cœur) による「直観」(sentiment) を通じて与えられる。パスカルにおいては、これらの能力と「理性」との間には截然とした区別が置かれ、混同を許さないものとされている。「直観」の前に「理性」は自己の無力を突きつけられずにはおかない。(1, 2, 3, 282など参照) こうして理性は、自らの外の契機たる現実的直観によってつまずかざるを得ないのであるが、それは両者の根源的資格の相違に拠ると言わなければならないであろう。

ところで、パスカルによれば、このような無前提的現実として、具体的には二つのものが想定されていたように思われる。その一つは「自然」(nature) であり、他は「人間」(homme) である。前者についてパスカルは言う。「自然的物(chose naturelle)は理性を超えている(surpasser)。(267) このことは自然的物(chose naturelle)が直観に属し、理性的推論はそのもの自体に対してどうすることもできないという前述の意味を含んでいることは勿論であるが、単にそれだけの意味にとどまらないことは断章72などから察知することができる。そこでは、直観的に把握される自然そのものですら、我々に全

貌を呈することはなく、我々に与えられるものにはおのずから限界があることが強調されているからである。(72参照) そして、このことは実際、すでに「繊細の精神」について考察した時に、行き当らざるを得なかった問題でもあった。(九州大学医療技術短期大学部 紀要第3号:パスカルにおける「繊細の精神」参照)

さて、自然的物の直観的把握にもおのずと限界があるとして、人間存在についてはどうか。パスカルによれば、人間は、その直観的把握自体が分裂の中に置かれざるを得ない存在と見なされる。即ち、人間は「欲情」(concupiscence) や「情念」(passion) に支配される「獣」(bête) にも等しい存在とされる一方、他方において、「理性」(raison) の階梯を一步一步昇りつめることによって遂には「神」(Dieu) にまで届き得る存在とされる。かくて人間は、「悲惨」(misère) ないし「卑小」(bassesse) と「偉大」(grandeur) という相対立する規定によって引き裂かれ、繕いようのない「矛盾」(contrariété)、永遠の「パラドックス」(paradoxe) と見なされるに至る。(409~443など参照) つまり「自然」の場合においても、その直観的把握は、究極において不明の暗黒の中に呑み込まれざるを得なかったのであるが、「人間」の場合においては直観的把握そのものの底が割れ、事態は一そう深刻なカタチを取ってあらわれていることがわかる。

こうして理性は、「直観」という外的契機自体の前に手もなく立ちすくまざるを得ないばかりでなく、依拠すべき「直観」ですら究極のものでないことを知るならば、なす術を失うほかないであろう。ここにおいて理性は、決定的に自己の限界の前に立たされると同時に、自らが何ものであるかを忌憚なく知らされ、自己の無力を蔽い隠しようもなく突きつけられる。ここで理性は外的契機によって、「推理」という内在的機能を超えたところに、即ち自己を超えたところに至り、その意味で自らの拡張を果し得ているものの、そのゆえにかえって危機的状況に追いやられることになる。理性は最早自らのうちに安住することはできない、さればと言って自

らの外には不明の暗黒をしか見出すことはできないのだから。そこには限りなく不安な状況がおとずれる。その苦悩は、パスカルの以下の告白に如実に示されている。

「私は私の生命の短い期間がこれまでの、そしてこれから先の永遠（*éternité*）の中に吸い込まれるのを眺める時、また私の占めている、私の目に映りさえもする小さな空間が、私の知らない、私を知ってくれぬもろもろの空間の無限のうちに沈み入るのを眺める時、私はどういうわけでここにいてあそこにはいないのか、それをおそれいぶかしく思う、なぜなら私がなにゆえにここにいてあそこにはいないのか、なにゆえに今にいてあの時にいないのか、その理由としては少しもないからである。誰が私をここに置いたのか、いかなるものの命令と処置とによってこの場所とこの時とは私にふり当てられたのか。」(205) また、「ここに私の見るものがあり、私を苦しめるものがある。私はあらゆる方面を眺める、そうしていたるところに暗黒（*obscurité*）をしか見ない。自然（*nature*）は私に疑い（*doute*）と不安（*inquiétude*）のたねでないものは何も与えない。」(229) 更に、「人間の盲目（*aveuglement*）とみじめ（*misère*）とを見る時、全宇宙の沈黙している（*muet*）のを眺める時、また人間が光をもたずひとりうち棄てられ、宇宙のこの一隅にさまようてい、誰が自分をここに置いたか、何をしに自分はここに来たのか、死んだら自分はどうなるのかを知ることなく、何を認識する能力ももたずにいるのを眺める時、私はおそろしい寂莫の島に眠ったまま連れて行かれ、目ざめた時、どこにいるかを知らず、そこから脱れ出る方法をも知らない人間のように、恐怖におそわれる。」(693) ここには理性の限界にぶち当たり、その果てに広がる無限の暗黒の前に立ちすくみ、不安と恐怖におびえるパスカルの姿が救いもなく露呈されている。

ここまで来た理性には、即ち理性の際まで追いつめられた理性には、後戻りは許されない。しかし、理性にとって光は理性からしかもたらされはしない。その果ては闇に包まれ、理性は何

も見ることができない。その時、闇に向かって跳ぶことは「賭け」（*jeu*）でしかあり得ないだろう。跳べば固い地盤に行き着くのか、それとも永遠の奈落に向かって堕ちて行くしかないのか、それは誰にもわからない。不明のものに向かって自己のすべてを投入することが、真の「賭け」の意味であろう。賭けは追いつめられた人間に許される唯一の手段である以上、そこにおいてなお賭けないでいるということは、最早許されない。パスカルが言っているように、正に「賭けなければならぬ。それは気ままなことではない。君は船出をしているのである。」(233) ここには、賭けに向っての一本の道しか用意されてはいないのである。かくて、理性の埒内では「賭け」ということは問題にならないにもかかわらず、「賭けなければならぬ。」と主張されたことの原因は一応の説明を与えられた。

ところで「賭け」は気ままなことではないにしても、自らの前に暗黒をしか見ない理性が、賭けに踏み切るのは容易なことではない。理性はためらい、ひるまざるを得ないだろう。そのような理性を力づけ励ます手段があるとしたら、それもまた理性であるほかないであろう。我々は理性の際に一応立ち得たにしても、理性にかわる何かを確実に手に入れているわけではないのだから。従って、この断章の大半は、賭けの前に尻込みし勝ちな理性を、理性に可能なあらゆる手だてを尽して、説得することに費されていると言っても過言ではない。それはかつてのパスカル自身の体験を抜きにしては考えられない迫真性を持つものであり、撓もうとしない彼の理性に次々と射かけられる言葉の矢は、そのまま熱を帯びて我々自身に降り注いで来る。そこで彼の取った有力な手段の一つは、確率に依拠する方法であった。数学における確率の格好の素材が賭けに見出せるのであってみれば、それは確かに、賭けへと理性をいぎなう最上の方法であると言い得るかも知れない。パスカルは賭けの「勝ち（得）」（*gain*）と「負け（損）」（*perte*）を貨幣の「表」（*croix*）と「裏」（*pile*）に当てはめて、つぎのように言っている。「神があるという表（*croix*）をとってその得失を計

ってみよう。二つの場合を見積ってみよう。もし君が勝つ (gagner) ならば君は一切 (tout) を得る。もし君が負け (perdre) ても君は何も失わない。それゆえ、ためらうことなく神があるという方へ賭け (gager) たまえ。」(233) ここには勿論、神が「無限」(infini) であることが前提されていることは言うまでもない。ただし「神」という賭けの対象は、すでに賭けてしまっているパスカルについてのみ妥当することであって、まだ賭けへ踏み切っていない我々にとっては、それが神であるかどうかは不明であり、それはただ未知の暗黒としてしか表現のしようがないことは留意さるべきであろう。ところで未知の暗黒への畏怖は理性を駆って、更に口実を設けさせ、賭けを避ける方向へ理性をいざなおうとするだろう。それが未知である限り、理性に対し完全な保証が与えられることはないのだから。理性の防衛、抵抗の最後の砦は、即ち勝つかどうかは「不確実」(incertain) であるのに、危険をおかす (hasarder) ことは「確実」(certain) であるという口実である。これに対しパスカルの行った説得はこうである。「危険にさらされる (s'exposer) ことの確実さ (certitude) と勝ち得るかも知れないことの不確実さ (incertitude) の間にある無限の距離 (infinie distance) は、確実に危険にさらされる有限の善と不確かである無限 (infini) とを等しいものにしてしまうと言っても何の役にも立たない。そうではない。だってすべて賭けをする人は、不確実を以て勝つために確実を以て賭ける。しかるに彼は、有限 (fini) を不確実に勝ち得るために有限を確実に賭けて理性に背くことがない。危険にさらされることの確実さと勝つことの不確実さとの間には、無限の距離などありはしない。あるというのは誤りである。なるほど、得ることの確実さと失うことの不確実さとの間には無限 (infinité) がある。しかし勝つことの不確実さは、勝ちと負けとのかずかずの機会に応じて、人の危険をおかすことの確実さに比例している (proportionner)。従ってもし一方の側にも他方の側にも同じ機会があるとしたら、勝負

は対等で行われることになる。そうしてその時、人が危険に身をさらすことの確実さは勝つことの不確実さに等しい (egal)。無限に距っているところではない。そうであるから、得をする機会と損をする機会とが同じであるところの賭けにおいて、有限を賭けて無限を勝ち得ようという時、我々の提案は限りない力を帯びる。」(233) ここには賭けの本質が実に鋭くえぐり出されており、しかも理を尽した整然とした語り口は、理性の怯懦の抗弁をむなしくさせるに十分であるように思える。ここにパスカルの真につよい理性の片鱗を垣間見ることができるよう思える。

しかしながら、これらの見解がいかに説得力にみち、ためらい臆する我々の理性を賭けの方へと駆り立て得たにもせよ、それはしよせん理性の埒内のことであるという限界は免れ難い。このような手段は究極において、「賭け」の行為そのものにとっては二義的なことであると言うほかはない。なぜなら賭けは、理性の彼方の未知の暗黒へ身を投じる行為なのだから。ここでは身を投じること、即ち賭けることだけが一切であり、それを除いてはすべては徒労である。この一点にすべては尽き、それはずしては何事もあり得ない。賭けの瞬間、局面は完全に旋回する。それは理性の彼方の絶対の断絶へ向けて跳ぶ一瞬であり、彼我を分ける一瞬である。それはまた、「理性」を捨てる一瞬とすることができるであろう。だからパスカルは言う。「こうして人は、どうしても賭けはしなければならぬ時には、虚無 (néant) の損と同じ確率で出ようとしている無限の得のために生命を危険にさらす (hasarder) よりもむしろ、生命を守る (garder) ために理性を捨てる (renoncer à la raison) べきである。」(233) と。

「理性を捨てる」とはどういうことであろうか。それはすでに述べて来たところから明らかのように、単に文字通り理性を捨てるということではなく、理性が勝手に切り取り、自ら承認することによってつくりあげた自己充足的な世界を捨てるということであろう。換言すれば、このような理性特有の態度を捨てるということ

であろう。従ってここには、端的な態度変更、自己改革の志向が見られ、実は「意志」(volonté)の問題が深く隠されていることを認めないわけにはいかない。これはパスカルの思想を貫く一本の太い柱であって、単なる認識の問題と思えるものですら、その裏に意志が潜むことはすでに我々の見て来たところでもあった。(九州大学医療技術短期大学部 紀要第3号：パスカルにおける「繊細の精神」参照) つまり、我々自身が理性をよしとし、そこに全面的に依存しようとする姿勢を取っていたがゆえに、理性が我々にとってすべてであったということであり、ここで理性の自己知、限界知と見えたものの背後には、実は意志がすでに、理性に付き随うことをやめているという事実が隠されているのである。だから「賭け」が問題になる次元では、意志は何ものにも依存ない端的な「自由意志」として立ち現われているのであり、このことが我々の不安を誘い、我々を極度におびやかすのだと見ることもできるであろう。言い換えるなら、賭けの瞬間は何ものにも掩護されないむき出しの意志が、そのものとして露呈される瞬間であり、パスカルの「賭け」の問題はこのことをも意味していると考えられる。このように見て来ると、「意志」は人間のあらゆる行動に伴い、多くの場合陰に潜みつつも人間を全面的に操り、彼の世界構築を推進し維持し、彼のすべての在り方を支え規定する恐るべき力を持ったものであり、だからこそあらゆる行為は、たとえ純粹認識と思えるものでさえ人間の責任であり、逃れようもなく彼自身に懸けられていることを示していると言える。それはおそらく、人間であることの究極の一点であると思なして差支えないのではなからうか。パスカルの所説は、たとえあからさまに表現されていない場合でさえも、そのことを深く秘めているように思える。そして、それが最も端的に打出されている場合が、「賭け」の問題であるということではできないであろうか。²⁾ それはこの事実が明らかに突きつけられる一瞬であり、そこから目を逸らすことも、それを他に転化することも許されないぎりぎりの一瞬である。その時我々は、人間存在の根源

的不安や重さに容赦もなくさらされることであろう。意志は自らが随い支えて来た世界の限界にぶつかった時、裸のまま立たされ、展望のない暗黒の中で決断を下さなければならない。その決断は過去への訣別の決断であると同時に、未だ明らかではないものの、過去とは全く別の、未来を引き受けようとする決断である。これが「賭け」ということであろう。それは人生における不連続の転換点であり、空白の過渡であると言うことができよう。このようにして人生は展開して行く。いや正確には、それがもし展開するものならば、このようなかたちを取ってしかあり得ないということであろう。「賭け」はだから、人間が人間として生きて行くことの重要な証拠であると言うほかはない。

ところで「賭け」の向う側は未知の暗黒であり、絶対の断絶であると幾度か指摘して来た。既知のものが何一つ通用しない際に立ってこそ、「賭け」というものが成立するのであってみれば、それは当然のことであろう。だがそれについて、全然予想が許されないというわけではない。なぜなら、今まで依存して来た世界を捨てることに「賭け」の意味があったのだから、そのような世界の否定として、ネガティブなかたちでそれを語ることは可能であるし、またこのことを手がかりとして、それについて何らかの構図を描くことは許されることだろうからである。そこで以下、この点について少しく考察を試みてみたい。パスカルの「賭け」において問題となったのは、理性によって構築された世界だった。だから「賭け」を契機として我々の向うところは、理性を中心とした世界でないことは明らかである。我々はすでに理性が自らを自覚させられ、自己の限界を突きつけられるのは、「直観」によることを見て来た。そして直観は現実的存在へつながるものである。してみると、理性を捨てて我々が向うところは、換言すれば「賭け」によって我々が向うところは、直観を介して我々に与えられる存在そのものの側ではないだろうか。直観はそのほんの一部を示すに過ぎないところの、我々にとってその大部分は未知である無限な存在者の側ではないだろうか。ところ

でパスカルは、「賭け」において我々が向う側を「神」(Dieu)と呼んだ。そうすると、パスカルのいわゆる「神」は、このような存在者をこそ指し示していると言えはしまいか。そうであるからこそ、パスカルにおいては、「心情」(coeur)による「直観」が、「理性」よりも「神」に近付き得るものと考えられているのではあるまいか。(282参照) さて、そのような存在そのものの側への「賭け」は、我々の態度について言えば、理性中心の見方から真に客観的なものの方への態度変更ということであり、ここで「理性」が存在の側から見れば、偏頗な自己中心的な見方に過ぎないと想定されざるを得ない点は注目に価する。理性は自分の都合によって、対象そのものは置き去りにしながら、勝手にそれを切り取り、自己満足をしているに過ぎないのであり、このような理性についての見方が、パスカルの繰り返し指摘している人間の「高慢(傲慢)」(orgueil)ということにつながるものと言えよう。(430, 435など参照)そしてこのことはすでに、我々が推理能力としての理性について考察した時に、理性そのものの性格から予想したことでもあった。そこで、「賭け」において我々が自己の狭い枠を脱して、存在そのものの側へ方向を転じるということは、自らがそこから出、そこに存在しているものの中に自己を位置付けるということであり、自らをありのままに、全体として了解しようとする姿勢をも示している。従ってそこでこそ人間は、真に人間として生き得、真理は真理として開示されることになるであろう。そして理性もまた、そのような場でこそ真にそのところを得、十分にその機能を発揮することができるであろう。パスカルの「賭け」は、究極において、このようなものを指向していたと見なすことができる。

さてここでもう一つ付言して置きたいのは、そのほかに「パンセ」全篇を通じて、「理性」に対する深い懐疑の言葉が散見する点である。例えば、「笑うべき理性、一吹き風の風であやつられる。しかもどんな方向にも。」(82)、「理性はどの方向にもたわむ(ployable)。」(274)、「無能なる理性(raison impuissante)

(434)など。これらの特性は勿論、直観を介して与えられる現実存在の前につまづき、その限界を突きつけられざるを得ないという、すでに述べた理性の自己中心的な本性に関係するが、ここではこうした理性の本性そのものが確固たる地盤に根ざさない、そこから遊離した独善であることによって、本来的に自分自身に依存することができず、他のより強力なものに依存し、操られざるを得ないという側面が強調されている点に注意が払われるべきであろう。だからこそ理性は、人間の意志の在りようでどんな方向にもたわみ、本能や欲望の手先にすらもなることができるのである。この点からしても、なぜパスカルが「賭け」の問題において、あれほどまでに意志に信頼を置き、すべてを託そうとしていたかがわかる。

以上パスカルの「賭け」について論じて来たが、ここで一応のまとめを与えて置くと、パスカルのいわゆる「賭け」は、理性が自覚的となり、自らを知りまた自らの限界を知ることによって、最早自己に依存することができなくなる状況の中で、すべての羈絆からはなれた「自由意志」が、理性中心の世界を捨てることを決断する瞬間にかかわるものと言うことができる。言い換えればそれは自己否定の一瞬であり、まだ定かでない全く別の世界への選択の一瞬である。それは人生の決定的転換点であり、この転換は自己中心的な思いなしの世界から、存在そのものの方へというかたちを取ると予想される。そして、パスカルはそこに「神」を置いた。してみると、パスカルのいわゆる「神」は真の客観を志向し、人間を人間そのものとして、そのすべてにおいて開示するものと見なすことができるであろう。パスカルの「賭け」は究極において、自己の都合で勝手に切り取り解釈していた世界を、存在そのものの側に返し、ありのままに捉えようとする態度への、意図的転換を示したものとすることができよう。

パスカルの「賭け」の問題についての考察を終えるに当たり、この問題は彼自身の身を以ての生涯の転機に深くかかわるとともに、現代に生

きる我々にも実に多くの示唆を与えるものであることに、今更ながら気付かざるを得ない。彼はすでに300年以上も前に、彼自身の体験に基づき、理性の限界を鋭く見抜いていた。当時、学の領域、特に「科学」の領域において、目ざましい成果をあげつつあった輝やかなしい「理性」に、早くも抑止をかけていたことは驚嘆に価する。「パンセ」全篇をおおう理性についての深い懐疑は、理性の本性に対する彼の深い洞察に依拠するものであろう。彼の容赦のない透徹したまなざしは、理性の底を射抜いたと言うほかあるまい。パスカルは、あの最も客観的なものを志向すると見なされる理性が決して確固たるものではなく、その本性からして一定の視点で現実を切り取るにとどまり、その大半は光を当てられることなく放置されざるを得ないこと、従って、この理性の弱点は理性に完璧な力を与えることを許さず、理性の名のもとに、別のより強力な力が、理性を利用し操作しがちであることを見抜いていた。それは、「科学」に対して早くも発せられた警告であったということもできるであろう。その危機を脱する彼の方法が「賭け」であり、そこには、「理性」より優位に立つ人間能力があるとすれば、それは「意志」であるとする見方が深く潜んでいる。意志こそが人間のすべてを決定し、理性をも操ることを可能にする。たとえ表面的にはそう見えない場合でさえも。だから、理性が公正でゆるぎないものであるとすれば、それはほかならぬ意志こそが公正でゆるぎないものであるからと言える。正しい意志に先導されてのみ、正しい理性はあり得る。そのことを痛感していればこそ、彼は無前提的意志の優位、即ち「賭け」を、新たな出発の前につよく打ち出したのであろう。この一点がない限り、何事もはじまりようがないし、何事も成立し得ない。だからパスカルの「賭け」は、やはり何ものにも代え難い重さを持つ。人間において、事はおのずから望ましい方向へ向うということは決してあり得ないからである。そして、その決断の果てには、自然も人もその全的領野において保証される世界がのぞまれる。そこでは自然が人間の都合だけで切り取られる

ことはなく、人が重要な本性の欠落に悩み、癒されぬ飢餓に苦しむこともなく、また自らのつくり出したものに置き去りにされ使役されることもない。このように見て来ると、パスカルの提言は、20世紀末、科学の世紀の極北に生きる我々にこそ向けられているとは言えはしないだろうか。自らが賭け、自らが決断した人へのみ許される力と重さを以て、彼は我々の耳もとで叫んでいる。「ためらうことなく賭けたまえ／ 決断したまえ／ すべてはそれからじまるのだ。」と。

〔註〕

- 1) 番号はBrunschvicg版の番号を示す。
- 2) この意味でも「賭け」の問題は、「パンセ」の中で極めて特異な位置を占めるものと言わなければならない。